

長唄三味線演奏家の駒と音色に対するこだわりについて

—他流派および他の三味線音楽ジャンルとの比較を通じた今藤流の特徴の検討—

岩崎 愛(国立音楽大学)

三味線の初学者にとって、三味線を演奏できる状態にセッティングすることは難しい。楽器を組み立てることはもちろん、糸を張る、駒を掛けるといった作業は、経験を必要とするものである。なかでも駒は、音色を調整するために非常に重要な役割を果たしており、駒の高さや形、重さや材質はもちろん、駒を掛ける位置も音色に大きな影響を与える。状況に応じた駒の選択や駒を掛ける位置の調整は演奏家の間では暗黙の了解となっているが、初学者の使用する教則本にはこれらに関してわずかな記載しかなく、また、研究においても駒に注目したものは管見の限り見当たらない。そのため適切な駒の取り扱いについて知る手がかりは、師匠からの口頭伝承以外ほとんど存在していないといえる。そこで発表者は、長唄三味線演奏家が理想的な音色を得るために行う駒の工夫を博士論文のテーマとし、研究調査を進めているところである。

これまでには聴取実験とインタビューを行った。聴取実験では、駒の位置を変更した長唄三味線の音を複数用意し、演奏曲目と演奏場所を想定して、それぞれに適した音を今藤流の三味線演奏家に回答してもらった。その結果、演奏場所と演奏曲目に応じてそれぞれ好ましいと判断する音色が異なり、したがって駒を掛ける位置も異なることが分かった。また、聴取実験の協力者には、聴取実験で用いた音の印象や、自身が駒に関して行う工夫についてインタビュー調査を行った。現在は、邦楽関連雑誌に掲載された三味線の駒に関する記述を収集し、長唄の他流派、および他の三味線音楽ジャンルの駒に対する工夫について調査中である。

本報告では、これまでに行った今藤流の長唄三味線演奏家に対する聴取実験とインタビューの結果、および現在行っている文献調査の内容を紹介する。これらの結果を総合し、今藤流と長唄の他流派、および他の三味線音楽ジャンルを比較して今藤流の駒に関する特徴を明らかにすることを試みる。